

令和4年度 第2回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日時 令和5年1月26日(木) 午後1時30分～午後3時30分
- 場所 市役所南庁舎7階 南73委員会室
- 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員] (敬称略 50音順)
 - 岩月明人 (とよたシニアアカデミー 事務局長)
 - 上山 仁 (地域学校共働本部推進アドバイザー)
 - 江里口あけみ (柘塚西町ささえ愛隊 副代表)
 - 鬼木利瑛 (株式会社 eight 代表取締役)
 - 小宮山利恵子 (株式会社リクルートスタディサプリ教育 AI 研究所 所長) 【副会長】
 - 坂元玲介 (とよた多世代参加支援プロジェクト 会長)
 - 戸田友介 (株式会社 M-easy 代表取締役)
 - 藤本修身 (豊田市区長会 理事)
 - 古川由香 (市民公募)
 - 古澤三秀 (市民公募)
 - 牧野篤 (東京大学大学院教育学研究科 教授) 【会長】
 - 三ツ石靖子 (豊田市市文化振興財団 交流館課 主任指導主事)
- 事務局
 - 南良明 (生涯活躍部 部長)
 - 加藤達志 (生涯活躍部 副部長)
 - 小澤真里 (市民活躍支援課 課長)
 - 和出広樹 (市民活躍支援課 副課長)
 - 堀田真悟 (市民活躍支援課 担当長)
 - 川瀬貴大 (市民活躍支援課 主査)

次第

- 1 開会
 - 2 会長あいさつ
 - 3 議事「人生100年時代における学びのあり方と方策」
 - ・事務局説明
 - ・意見交換
 - 4 閉会
- 議事「人生100年時代における学びのあり方と方策」
 - 事務局：資料「人生100年時代における学びとあり方と方策について（中間とりまとめ案）」に基づいて説明
 - 意見交換

【 委員意見 】（要約）

A 委員

私からは 2 点ほど提案をさせていただきたい。

まず、全ての学びに必要な視点として、根底にあるものとして「発信」という言葉があると思う。いくらよいことをやっても誰にも知られない、欲しい人にその情報をリーチできないでは意味がないと思っており、今回の中間とりまとめ案には「発信」を入れていただきたい。

豊田市が発信するという話だけではなくて、学びに参画する全ての人たちが発信をすることで、新たな職、趣味、あるいは仲間を得られる。

もう 1 つは、1 2 月の生涯学習に関する座談会で同じグループになった方からのお話であったが、行動への「はじめの一步」がとても難しいということ。その方が「はじめの一步」をどう乗り越えられたかという、全然知らないコミュニティに行く機会があり、全く自分のことを知らない人たちばかりのコミュニティに行くことがあったという。そこで勇気を出して踏み出してみると、そこから瞬く間に色々なことが起き始めたという話があったため、「はじめの一步」をどのように打開していくかという視点を入れていただくのはどうかと思う。

B 委員

個人がどう発信をするかについて言及をいただいた。行政としても発信をする機会あると思うが、発信する行為は、受け手との関わりを作り上げていくことへの第一歩にもなるのではないかと。小宮山委員自身が利酒師の資格取得について発信されたところ、色々な仕事が舞い込んでくるといった話があったかと思う。発信することにより、色々な人に知ってもらいながら他者と繋がっていく第一歩であるのではないかという話であった。もう少し言えば、はじめの一步をどう踏み出していくのかといったことはとても大切であり、そういう観点も議論できればと思う。

C 委員

私も発信について賛成。市では、自治区で回覧板を回しているが、デジタル回覧などワンストップで情報が得られるとよい。また、生涯学習の機会として、著名人を招いた講演会が有効ではないか。私自身、金沢市の市民大学に関心がある。

B 委員

デジタル化による自治区事務の改善やワンストップサービスによる一元化により、行政の取組をきちんと届ける仕組みが作れないかという話であったかと思う。情報を広く行き渡らせることと個人がどう発信していくのかといったことも今後の社会を考える上では大事なのではないかと思う。

D 委員

生涯学習分野が地域の文化を作ろうとするくらい根底にあるもののような気がしている。中間とりまとめ案 9 ページの「失敗に対しての寛容な土壌、挑戦ができること」というのは、本当にすごく大事なこと。だからこそ学べるし、やり直せるような気がしている。そうなった時に、行政の中はものすごく難しい。失敗が許されないみたいなのが散見されていて、皆さん抱えているものもあると思うが、この辺りもう少し緩まないかを感じる。

例えば、わくわく事業の業務をみても職員が変わると、失敗の寛容度がだいぶ違う。去年の職員はこう言っていたのにとすることがある。それを乗り越えていけばよいが、諦めちゃったよって話もよく聞く。そういう意味では、行政の担当者も市民と一緒にチャレンジをして失敗も含めて受け入れていくあり様でいてほしい。せっかくやる気になったのに折れてしまうと次のチャレンジがしづらい。細かいところだが、そういったところに、端的に表れるのかなと感じる。市民もそうだが、行政も企業も失敗を寛容しながら 次に向かっていくという取り組みを小さなおところから始めていけるとよい。

B 委員

失敗の寛容性については、行政だけでなく若い人全般や学生もそうである。学校で失敗してはいけないと思いついで大学に入ってくるため、大学側もとにかく失敗しないように指導してくれというように言ってくる。どんどん息苦しくなってくるような社会かと思うが、それを受け止めて次にチャレンジにつながるような寛容性や仕組みが必要ではないかとの話であった。

E 委員

豊田市は、失敗が許されない文化のような感じがする。高齢者の支援を主にやっているとトヨタ自動車 OB や製造業出身の方が非常に多い。彼らから話を聞くと、仕事上での失敗は絶対ダメという価値観を持っている方が非常に多いと感じた。豊田市の文化として、失敗が許されない、確実に何かを積み上げて石橋を叩いてやっていく文化を思うと、失敗と挑戦を繰り返すというのは、とてもハードルが高い内容と個人的には感じる。それもあってか、豊田市は、近隣自治体と比較して、NPO 団体や若い起業家が非常に少ない。

私も多世代参加支援プロジェクトを昨年度から立ち上げ、チャレンジをし続けて失敗を繰り返した。任意団体で売り上げや給料の心配が少ないため、失敗が許されチャレンジもできる。色々な人を巻き込むことも実際やりやすいということがこの団体をやっているととても分かった。ただ、会社となると利益を上げ、従業員の給料を担保しなければならないため、団体の特性によるところはあるかもしれない。

また、高齢者、障がい者、子どもが交流する取組にチャレンジしているが、こども園との連携を考えるなかで、民間は話が進みやすいが公立との連携が難しい。同じように学校も同一の状況。通信制のルネッサンス高校とは、毎月ミーティングをしながら、東京の若者支援団体とつないだり、地方の IT 会社とつないだりできる。公立と私立の特性をどのようにつか

み、生涯学習を推進するどのようにしていくとよいか悩ましい。

B 委員

トヨタ自動車の風土のようなものがあり、企業として企業人として失敗してはいけないため、そうしたことが基本的に社会全体の文化や未来を作っているのではという話であった。例えば、団体の特性の話であるが、失敗が許される段階やそうではない段階もあるだろうし、公立や私立を含めて、もう少し関係性を捉えながら生涯学習を展開するのかという議論も必要であるのではないかというご指摘であったかと思う。

A 委員

トヨタ自動車はすごく失敗を許す文化のように見えていたので、大変面白く興味深い。トヨタ自動車にはカイゼンという言葉がある。失敗がたくさんあるからこそ、改善が生まれるイメージがすごく強かった。

B 委員

父がトヨタ系で働いていたが、品質管理という失敗してはいけないところにいたが、実は失敗ばかりのようであった。失敗を見つけ出して改善するのが楽しいというような生き方をしてきたので、本来は失敗を認めていくというような許す風土がなければ、ここまで企業が発展をしなかったのではないかと思う。

また、大企業の方々は大体が失敗を恐れているというか、口では失敗しトライアンドエラーだとおっしゃるが、議論をしていけばしていくほど、実は管理を強めようとする傾向にある。システムが完成しているところでは、失敗してはいけないことになるのだろうが、システムを壊し変えなければいけない時代に入っており、変え方がわからない、あるいは、怖くて変えられないという状況で足踏みをしているという印象もある。

本来、新製品を開発する場合には、昔の製造業であれば、試作品を 1,000 個作って 3 個当たればよい方だというような議論があったと思うのだが、それが許されなくなっていることがあると思う。それは、日本社会の「変わりなさい」といった風潮にも関わるような感じがするのだが、その辺りはいかがか。例えば、先ほど、石橋を叩いて渡る、またはカイゼンという言葉があったが、本来失敗は「してはいけない」ではなく、カイゼンしていけば課題はあっても失敗は「ない」のかもしれない。

次々と失敗を続けることによって物が良くなり、新しいものが開発をされていくと考えれば、実はこれは失敗ではなくて、きっかけだったと捉えることができる。どんどん新しくなり続けていくという運動みたいなことが起こっていたところに仕組みが出来上がり、継続する中で今度はこの仕組みを変えられなくなってしまったということが 1 番大きいような感じがする。

私たちの子どもの頃は詰め込み教育を受けてきたはずなのだが、実は学校ではいろんなことをやることを許されていた。しかし、今の子どもたちは、なんとなく色々なことに手を出しては

いけないとか言われた通りやってあげばいいのだと思い込んでいるところがあるような印象をとても強く持つ。この辺り、お子さんお持ちの方はいかがか。

C 委員

トヨタ自動車に40年近くいたが、色々な文化や捉え方ある中で、失敗を許さない風土は初めて耳にした。生産性を上げるためとではなく、いかによいものを作るかという視点が一番にあった。チャレンジ精神を失っては終わり、成長がなくなってしまう。一つのミスの取り上げ方で、攻撃される部分も確かにあるが、そこをいかに周りでカバーするかというチームワークを教えていくというのが基本。そのため、少し違う感覚なのではと受け止めた。

E 委員

色々な方に話を聞くと、開発部門などの部署は失敗をしてチャレンジしてカイゼンにつなげていくと聞いた。ただ、製造ライン部門は、少しでも動きが止まってしまうと怒られることもあるようだ。何を失敗として捉えるかという問題だとは思いますが、大きい会社での失敗と小さい会社での失敗では、失敗の捉え方が少し違うのかと思った。

B 委員

失敗をどう捉えるかということよりは、むしろ失敗してはいけないというような思い込みが広がっている社会において、人生100年ということを考えながら、子供たちが100年生きられる社会をどう作るかという議論になるとよいと思うのだが、その辺りはいかがか。例えば、なぜここまで失敗を恐れる社会になってしまっているのだろうか。

F 委員

私が勤めていたところでは、毎月一人1件、カイゼン提案をしなさいという指示があり行っていた。

私は事務屋であったため、こうしたら次は楽に業務をやれるという提案をしていったという経緯がある。そのため、失敗をして、カイゼンするというよりは、自分たちが今後、何かを行うにあたり楽にできるようにというのがカイゼンではないでしょうか。

B 委員

必要は発明の母といたりするが、現状認識をきちんとした上でそれをより良くするためにカイゼン提案がなされていた。失敗を受け止めながら、次へつなげていくというようなこと。

D 委員

色々なことを20年ぐらいやり続けているのだが、その根底が揺るがされているようなことを日々感じている。20~30年後にどういう時代になっているか本当にわからないため、今やっ

ていることはもしかしたら全部やっていないのかもしれないという感覚が常にある。だからといって不安であるということではないが、さきほどのカイゼンや失敗の話を聞いて、目の前にあるものがもしかしたら全部ないかもしれないという状況では、どうカイゼンするのだろうということをふと思ったりする。これから本当に必要なものは何かを作っていくような、ゼロから学び直しぐらいの視点というのがあるのではと思った。

B 委員

将来がはっきりわからない状態で、今やっていることがきちんと続くかどうかもわからないような中でどちらかという、今のものを守りたくなるといった保守的になってしまうのではないかと。そのため、変えようとせず、むしろその枠付けられた方が楽であり、変わらないでいられる方が安心であるようなことになっていると気がつく、その結果、実はどんどん状況は悪くなっていくのではないか。

G 委員

日本人だからかもしれないが、人間は元々、安全な道を歩きたい生き物なのと思う。私自身が教員時代に行っていたノミの実験についての話をする。ノミを 20 センチしか高さのないところに閉じ込めると、実際にはもっと飛ぶことができるのだが、その蓋を取ると 20 センチしか飛ばなくなる。その後、高く飛べるノミを目の前に見せてあげることによって、元に戻っていく習性がある。

人間は、安全な道を歩きたがるのが本能。失敗をしないというよりも、失敗を生まないシステムということの方が大事と常に思っており、失敗を生まないことは、失敗させないという意味ではなく、失敗してもそれを許容できるシステム。企業では、失敗も組み込んだ予算作りをしていくべきかと思う。そうでなければ、失敗されたら責任を取られるという悪循環の繰り返しになってしまう。

子供たちは、出番と責任を与えればやる。そこで失敗が起こったとしても、大人が寛容であれば、子供の失敗を次へ活かしていくということが生まれてくる。それこそまさに、失敗を生まないシステムかと思っている。生涯学習においても大切な視点。一方で、失敗をしなければ次へ進まないというのもあるため、チャレンジさせるために何をしたらよいのかということも考えていかないといけないと思う。

また、校長時代に若手教員に対して体育祭を今までと違う方法で計画するよう指示をしたところ、他校の例を参考にするか今までの経験を参考にしていた。ゼロから作るということの発想がなかった。どのようなことをしたら子どもたちが生き生きと活動するのだろうかではなく、まず、形を作ってしまうおとししてしまうということがあった。

臨床心理士である学校のスクールカウンセラーに「若手教員がゼロから物事を作れない」と話をしたときに、「それはあなたが悪い」と言われた。また、「学校のトップが失敗を許さないような考えであると、これまでのものをたたき台にし、そこから物事を作っていく。組立キットを使っ

た授業ばかりしては教える側としても新しいものは生まれない。挑戦できる環境をトップが整えていれば、彼らがいずれトップになったときにそういうことを経験させられるリーダーシップを持つのではないか。」と言われた。

また、公立のこども園や学校との連携が難しいと言われたが、これは学校次第だと思う。私がいた学校は、全校で 700 人ぐらいの学校であったが、多くの生徒が年間を通じて地域の活動、ボランティアに関わっていくことができた。学校次第であるが、公立でもある程度の時間を確保しつつ、その中でやれることを子供たちに投げかけていながら、地域の人に感謝され、自己肯定感を得ていくという体験ができるはず。そういった中、寛容な姿勢を持ち、失敗を生まないように周りの大人がルールを敷くのではなく、色々な準備をし、時間をかけてもよいというような覚悟を持つ。ある程度のお金も必要になってくるため、そのあたりも余裕を持った体制作りをしていくことが若い人たちと高齢者とが社会の中で良い関係を作り、チャレンジをしていくし、失敗を恐れないということを学んでいけるのではないかと思う。

B 委員

失敗の議論であるが、失敗をさせないのではなく、失敗を責めない仕組み作りや失敗を生まないような仕組みのあり方を考える必要があるのではないかという話だったかと思う。

公立学校との連携が取りにくいということであるが、学校のカリキュラム編成権は校長にあるはずであり、校長がやろうと思えば、本来はいろんなことはできるはず。何が大事かを考えれば、子どもにとって大事だということを基本におき、少しぐらい他の学校と違ってやるべきことはあるのだという議論ができるはずだろうと思うが、どちらかという組織の論理が優勢となってしまう、うまく連携が取れなくなってしまう。そうすると子どもを枠にはめようとしてしまうことが起こるのではないか。

仕組みがあるのは一体何のためなのかといったことを問い返し、制度が一体何のためだったのかといったことを捉え返すと、ここは変えた方がよいなど制度の失敗を認めなくてはならないということが起こるのだろうと思う。

H 委員

市の事業において、5 年～10 年と長く続く事業がよいと思われがちなのではと思うが、シニアアカデミーは 20 年ほど続いているものの、今の時代に合っていないと私は痛感している。

高齢世代の就労体系が変化し、寿命も長くなっているなどこれまでと背景が変わってきている。60 歳以上の方を主に対象としているが、受講生の年齢が 30 歳近い差が出ていることもあり、一緒に扱うことがよいのかと思う。

その意味では、長くやればよいのではなく、その時々状況に合わせて 2～3 年ごとに事業を見直していくことが望ましい。現在、私が着任して 3 年目であるが、ようやくコロナが落ち着き、1 年間講座を見ていて今のままではいけないというのが見えてきているため、根底から

見直すという作業をするべきと考える。

B 委員

シニアアカデミーは、学校形態を取りながら高齢者の生きがいを支援する取組として始まり、続けるうちに取組を維持することに注力してしまっているという話だと思う。仕組みができてくると、どうしても仕組みを維持することに意識がいつてしまうため、もう一度その仕組みを作った原点はどこにあるのか、なぜそれが必要になったのかといった議論も含め、必要でなくなればその仕組みはいらないという議論もあり得るのではないかということだと思う。

私に関わっている教育振興基本計画の策定でも同じような議論があった。経済界の方々には、松尾芭蕉の俳諧の理念である「不易流行」という言葉を引用して、日本文化は“不易”であり、経済は“流行”であると言う。日本の文化伝統を保つためには、経済が発展しなければいけないといたい時に、「不易流行」という言葉を引用するのだが、これは使い方を間違えている。

松尾芭蕉は“不易”と“流行”を分けておらず、常に“流行”でなければならず、変わり続けなければ、不易は保てないといっている。よって、本来は変わり続けていくことが、伝統文化の本質だということである。

また、教育基本法の理念が“不易”だとすると、“流行”とは何かといえば、日本社会が変わっていくこと。教育振興基本計画の文言において、新しい社会を作り、形成し、担っていく人材の育成について記載される予定だが、社会も変わり続け、経済も変わり続け、文化のあり方も変わり続けることを前提としたもの。

I 委員

子どもは、自分の興味があるものや好きなものにはすごく没頭していて、それを学びの一つとして捉えるならば、学んでいる子供たちはたくさんいるといえると思う。ただ、「発信」することについては、だんだん年齢とともに自分の中で満足して完結する場合や人からどう見られるかわからないため少し外に言うのは控える場合など子どもによっていろいろな想いが働くのかなと思った。また、100個作って3個駄作が出た際、3個も駄作を生むなと言いがちだが、この3個が見つかってよかったというところを大事にしたい。

例えば、授業参観で挙手するのは大抵決まった子たちで皆が正解を発言する。正解のない問いでは、その子なりの発信ができてよいはずだが、緊張する中で発言した際に、先生から「間違っている」と言われてしまうと「僕は間違った、私は違ったのだ」と思ってしまう。率直な意見を発信してよいのだと認めてくれる先生や大人がいるのだというのを子どもたちが実感する機会が必要。やはり、身近な大人が否定で入るのか受容で入るのかのような視点を子どもたちの学び育ちを見ていく人たちがきちんと意識し切り替えていかないといけない。

物事を違う視点で捉えポジティブに解釈するリフレーミングの概念を仕事で活用している。例えば、整理整頓ができないのはマイナスだが、見方を変えると物を大事にしているという考

え方。長所短所の両方が表現できると思うが対応する大人がどういう視点を持っているのか、何を大事にしているのか、言葉掛け 1 つで変わってくるため、そこをうまく個のキャラクターを捉えながら、引き出す力というのも大人が備えていかないといけない。

B 委員

中間とりまとめ案 8 ページにアンラーンについて記載があるが、アンラーンは、学ばないではなく、規制概念を壊していく、崩していくこと。日本語で言えば、以前は学び捨てる、今では学びほぐすと言う。学びほぐしができると、学び直しができて違うものを生み出すことにつながる。そのような概念で、大人が子どもをしっかりと受け止めていく、見方を変えていくことも必要かと思う。

また、生物学者のレイチェル・カーソンが 60 年に前から言っているセンスオブワンダーという言葉があり、子どもたちはびっくりする感性を皆が持っているという意味。彼女は、人間は元々、そういう力を持っているが、放っておいてよいかというそうではないと言っている。子どもたちがセンスオブワンダーを発揮でき、探求するためには、大人が「大丈夫、やっごらんよ」というように背中を押す関係がないと、実はそれは発動されないのだと言っている。

これまで子どもたちを型にはめ、言われたことをきっちりやるのがいいことと評価する枠組みをつくってきた。その枠組みが機能しなくなっており、これからは、それを壊さなくてはならない。子どもたちのセンスオブワンダーをどうするのか、それを受容するという意味での失敗といったことをどうするという議論かと思う。

J 委員

キャリア支援や起業支援をしている中で、最初の一步を踏み出すか踏み出さないかというのには、いつも壁があると思っている。前回の座談会で、江里口委員から全く異なる環境にいきなり立たされてどうしようと思った時に考えが変わり、チャレンジしたところ、前に出るタイプになったという印象的な話があった。ある程度の必死さやなんとかしようとするエネルギーがあるからこそ、失敗を恐れずに前に立ってみようということが起きるのかなというのを思った。

そのような中で、学びが、どう一步に繋がるかを考えるとインプットするだけでは繋がらないと感じている。何か、チャレンジングな場所に行くとか、新たな経験をするという状況にないと学ぶという意欲にもつながらず、学んだところで一步が踏み出せない悪循環になると考える。プロボプロジェクトでもトヨタ自動車の社員やOBが関わっているが、失敗を恐れないというか絶対に成果を出させてやろうというような目標達成への意気込みが高く、NPO 団体が尻込みしてしまうような感じではある。

このようなプロジェクトを通して、多様性が発揮され、全然違う人たちとの接点で今までのトヨタ流のやり方が通用しないことを痛感し、何が必要と考えたら実は目標設定力ではなくて、対話力だと気づくことがあった。

豊田市ならではの生涯学習の方向性としては、色々な講座を羅列するのではなく、プロ

プロジェクト型学習を大人はじめ、シニアや障がい者、外国人の方が取り組むことができないか。例えば、何か一つの社会課題に対して NPO 団体を支援するプロジェクトを実行するなど。そのためには、コーディネートが必要だが、そのような学びのプラットフォームがあれば新しい失敗ができる。実際に体験し、全く異なる環境に置かれてこそ学びが発揮されるのだと思う。

また、中間取りまとめ案 9 ページの「学びの可視化」について、私がキャリア支援している中で、転職や副業希望者のうち、自分の活かせるスキルを全く言えず、副業でさえ採用されなという社会人が結構いる。プロジェクトの失敗体験などを含めた学習歴のようなポートフォリオが作られていけば、むしろ失敗の質と量が高いほど人ほど採用されやすいといった失敗に対する評価がガラッと変わるような学びの可視化がうまく機能していくとよい。そうなると、喜んで失敗しようという気持ちになり、失敗を許容できる世の中にもなるのかなと。

B 委員

単に情報を流すだけではなく、実際にやってみることも実践ベースまで落とし、そこで色々な交流をしていくながら、経験を積んでいくことにより、自分も変わるという体験をしてみることが大事ではないかと思う。学習歴の可視化がなされることによって、むしろ失敗を評価してもらえたり色々な失敗をした方が成長してきたということの証になるのだという見方にもつながる仕組みも作れるのではないかという話だったと思う。

K 委員

高齢者クラブの枠の中では思うようなことができず、高齢者クラブに加入していない方も一緒に活動できることをしたいことが理由で高齢者クラブに属さない団体をつくった。地域では、高齢者クラブの代わりも担っている。失敗しないと前進しないため、失敗をしながら次に生きていくようなことにしようとしている。

ようやく、一緒に活動する仲間が、「失敗するぞ」と言いながらやるようになってきたため、少し前進したと感じる。私自身、失敗が多い人生であるため、恐れずに進んでいる。これから先は仲間と楽しく関わり楽しく人生を歩みたく、常々そのようなことしか考えていないため、「失敗を恐れずにチャレンジするぞ」と皆で言い合いながら活動している。

B 委員

男性が計画を立て、心配しないように色々考えていくという話であったが、こういう社会になったところには、バックキャストで PDCA を回すなどと言い始めてからなんとなくおかしくなったのではないかと。例えば、5 年計画を作り、5 年後の目標を立て、そこから逆算方式で今年何をやるか決めて達成できたかを全部評価していくこと。以前は、フォアキャストで簡単な目標を立てながら、次から次へと投げ続けていったため、改善という話もできた。

達成できる目標を作ろうとするため、小さい目標になり、達成ができないということが起こっていき、どんどん萎縮してしまうことになっている。その意味では、まずはやってみながら考えれ

ばいいじゃないかという話の方が、実は楽しく回っていく。失敗ばかりとあったが、実は失敗は失敗でなくなっていて、やりながら考え、振り返りながら動いているため、ダメなら次の案が出てくる。そういう形でぐるぐる回り続けるといったことの方が実は楽しいというようなことをおっしゃったのではないかなと思う。

A 委員

これまでの議論を踏まえ、失敗の定義を豊田市で定めた方がよいかと思った。共通認識として、失敗という言葉がネガティブに捉える人と、ポジティブに捉える人がおり、それもグラデーションがあるなと思った。そのため、豊田市が考える失敗がこうだということを打ち出したがよいのではないかなと思った。リクルートの社長は、「失敗の総量をマネジメントせよ」とよく言っている。ここでは失敗してもよいがここは頑張ろうという感じで管理するとうまくプロジェクトが回るという話である。

また、生涯学習を考える観点で、自分を経営するという考え方もあるかと思っており、経営というと企業や組織を経営するというイメージがあるが、自分を経営していく視点は重要だと感じる。自分を経営していくためには、どのような学びが必要で、どのように仕事へつなげ、お金をどのように回さなくてはいけないことなどといった観点も必要になってくるため、自分を経営するマーケティングも必要になる。

B 委員

自分をどうマーケティングしながらどう社会に打ち出していくのかということも含めてだと思う。

E 委員

市内には色々な公園があるが、家の前の小さい公園で、朝は高齢者の人がラジオ体操し、午前中は子連れのママが、昼からは小中学生、夜になると高校生、大学生のカップルが利用している。一方で、交流館が学習の場としてどのように活用されていて、今後どう使われてくのがよいかを聞いてみたい。

L 委員

よく利用いただく年代は、60代以降の方、子育て中のママと小中学生が中心で、働き世代は利用する時間がない感じを受けている。交流館は、地域の拠点施設としての位置づけであり、自治区との接点も多く、地区コミュニティの事務局にもなっている。

元々は、社会教育施設であったため、昔ながらの学びがずっと残っており、今も継続をしている。しかし、ここ数年は生涯学習という立ち位置から少し離れて、もう少し身近な市民の活動を支援するところにシフトしている気がする。激しく変わっていく社会に一人一人が対応していくためには、生涯学習が必要でそのために交流館が存在しているということが原点であったと思うし、それは揺るぎないものであると私個人は思っている。

こうした時代において、中間層の年代の人は、学校卒業後、何かを学んでいるのだろうかと思う、果たして働いているだけでよいのかというのは、やはり疑問に思う。そういう中で、交流館は今のままではいけないし、交流館の利用が少ない中間層の人たちに何か学ばなきゃいけないとか学びたくなるような気持ちになる機会を考えなくてはというように思った。

また、子どもたちがこれから人生を考え歩いていくために、交流館で何ができるかも重要な視点と思っている。先ほどから失敗の話も出ているが、結局のところ大人が先に答えを作っているため、こうあるべき、こうするべき、こうなるべきみたいなものを持って学習や体験に与えすぎているかもしれない。答えが先にあるから、それが失敗っていうように捉えがちになるのかなと思う。

実際、色々なお子さんはいると思うが、どうすればマルがもらえるのかという考え方になり、正直なところ私自身もこうあるべきという教えの中で生きてきたため、ゼロから自分で考えなさいと言われると、少し苦手意識が出る。未来を担う子どもたちに対して、何をやっても正解、何をやっても自分で考えられる力をつけていけるような体験や機会を交流館が作らないといけないのかなというように思った。

B 委員

例えば、中間とりまとめ案 8 ページに、「学び直し／リスキリング・リカレント教育」の記載があるが、リスキリングとリカレントが別でよいかという議論がある。リカレントが上の概念で、リスキリングはその中の一部でスキルをつけ直すことである。

なぜ今、コミュニティスクール構想が出ているかという、子どもが 100 年間生きる時代になってきており、学校が関われるのは最初のせいぜい 15 年間のため、その後、学校で習ったことを 80 年間も使い回しができる社会なのかと言うと、そうではないということが前提である。

学校で教えることは一体何かというと、知識を教えるわけだが、もう一つ大事なことを教えなくてはならない。それは、体験とか探求の仕方を教えること。教員についても、教える先生から、寄り添って一緒に探求する先生に変わってほしいということで、法律も変わりつつあるが、なかなか現場まで浸透してない。

例えば、交流館の中で子どもたちが大人と一緒に探求活動したり、大人の中で揉まれていくことで、自分なりに色々な知識を得ていき、学校に帰って子供たち同士でそれを教え合い、高めあったりして、さらに違うことをやりたいと言って、地域に帰ってくる。このように子供がきちんと学校を来するようにというのが、コミュニティスクールの基本的な考え方である。

失敗も受け止めながら、一緒にやろうねという環境をどう作っていくのがセンス・オブ・ワンダーの要点。子供たちが能力を発揮しながら、面白いことやってみようという環境ができるような仕組みになっていくかどうかといったことが問われている。交流館をどう活用していくのか、どのように交流館が子どもの教育や大人とのあり方に関われるのかといったこともこれから議論になるのではないかなと思う。

D 委員

本当に生涯学習や社会教育の大事さをひしひしとを感じるばかり。生涯活躍部がどうという世界ではなく、生涯学習が色々なところでの根底概念のような気がしている。次の世代の子どもたちのために大人がどうあるべきかというのをわくわく事業の話で例えると、支所の職員かもしれないし、交流館の職員かもしれないし、市民窓口を担当する職員なのかもしれない。彼らがどのように接するかによって、ガラッと異なる世界だとすると、プロジェクトを作って実践することよりも全庁的に生涯学習の理念を共有することが重要かもしれない。それが、次の未来をつくるのだというような一つ上の概念の上として生涯学習の理念が埋め込まれることで、発揮されていくような気がする。

今後の具体的な方策を考えるうえで、生涯学習の理念を浸透するための庁内職員研修などを行政が率先的にやるという話だけでなく、市民が率先的にやるような機会づくりなど自分たちでやれるところもなにかありそうな気がした。

B 委員

落とすどころがどこにあるかということにも関わると思うが、今日の議論は失敗といったことをベースにしつつ変わりにくいや変わらない社会になってしまっているところをどう変わるようにしていくか変えられるのかという議論につながるのだと思う。

それと、人生 100 年を生きる時代においてどういう生涯学習のあり方があるのかという議論をしていくということになる。行政計画として行政がどうするのかという議論にしていくのか、市民一人一人がどう受け止め、どういう市民を作るのか、またはどういう社会を作るのかという議論で話を持っていくかによって、受け止め方が変わってくるのだと思う。その辺りも議論しなければいけない。

よくあるのは、行政の文章として出されると、市民から見れば行政がやってくれるという感じになり、私がよく関わる教育計画の策定でも、計画を立てると、これは教育行政の計画だというように言われてしまう。そうではなくて、市民が当事者として、担い手としてやっていくような関わり方をどうしていくのかということも含めて、そこをきっちりしておかないと、すべて市民によって依存されてしまう。自分たちで動こうとする事例はたくさん上がってきているため、当事者として自分たちが受け止めて子どもにどう関わっていくのか、または子供がどういう生き方をしているのかといったようなことを、真剣に考えましょうというようなものにもなるのかもしれない。

例えば、レジャーという言葉は、仕事や日常生活があつてのレジャーであり、レジャーがあることで気晴しをするということになるが、それはカジュアルレジャーという気楽なレジャーのことをいう。

それに対して、シリアスレジャーという言葉がある。訳せば真面目なレジャーであるが、例えばボランティアに行ったり自己研鑽したり学びに行ったりするというのはシリアスレジャーとなる。今それを研究しようというグループが動いているが、大学の学生からは、「我々は仕事がシリアスレジャーでないと仕事をしたくない」と言われた。仕事を通して自分が高まっていく感覚を持

ち、仕事を通して人に貢献できているとかありがたいと思ってもらえることが実感できるような仕事でないといけないようだ。いくらお金をもらえても苦しんでやるような仕事で、レジャーに行かなきゃいけないような仕事はやりたくないと言う。その意味では、むしろ生きることそのものが、社会に自分がちゃんと位置づいていて、自分が役に立っていることや人からありがとうと言われる関係にあったり、それを通して、自分が高まっていく感覚があり、やっていてよかったと思えるようなものを仕事にしたいという気持ちになっている。ずいぶん私たちの感覚の仕事、就職という感覚とは違ってきている。

また、東京都足立区で子供たちを主役にするまちづくりを検討する際、小学 5,6 年生の子どもに来てもらったところ、不登校の子どもが多かった。その子たちに、大人はこのように考えており、子どもを主役にしてこのようにやるという議論をしていると言ったら、それはおかしいと言われた。「子どもを主役にするって言った時点で、大人目線で上から見ている。そもそも大人と子どもを分けているのでは」と言われた。大人はみんな黙ってしまった。

どうしようかと思っていると子どもたちから、「私たちが一緒にやりたいが、大人の成功経験の話は聞きたくない。失敗をして今自分がここにいるのはなぜかという話が聞きたい」のだと。彼女たちが言うには、「自分たちは学校で失敗してはいけないと思込まされていて、それが嫌で学校に行けなくなった」のだと言う。

また、「大人たちはみんな成功してここにいるのか」と言うため、「いや、みんな失敗だらけだった」と返した。そうすると、「そういう話を聞きたい」と言う。それが、その子たちにとってみれば自分はちゃんと受け止めてもらえているということにもつながるのではないかと思う。

先ほどの学習歴を評価することも、もしかすると、今のままで学習歴を評価してしまうとこの子は失敗だらけだからダメだとか、点数が低いからダメだという議論にしかないのではないかという怖さがある。失敗しても大丈夫だとか失敗こそが大事なのだというようなことになると、学習歴のポートフォリオ化というのがとても意味あるものになっていくのではないかと思う。その意味で、何か観念を変えていくというか、失敗とは何かといったことを豊田市から発信し直すことがあってもよいのかもしれないと思う。

J 委員

将来的に子どもたちは大丈夫だなと感じがしている、やはり大人がどうするか。大人たちが生き生きしていることが大切だと思った。

先ほどの失敗の定義や子ども、大学生の話もそうであるが、企業に入社した後の若い人たちからの相談を受けていると、まさにシリアスレジャーを目指して就職し、理想と現実が異なりメンタルをやられてしまい、休職する方がいる。復職するにしても自分らしさを発揮できない職場だと転職を考えるがそうなる自分は何をしたいのかわからなくなる。結局、実家に戻ってしばらく休んでしまうということがある。

もしかすると、これが人生に失敗したということ植え付けさせてしまっているように感じる。失敗の定義といったところの「失敗の中身」が本当に今の世の中では深刻に捉えられてしま

う。失敗は良いといわれても、メンタルを病んで、しばらく休職して引きこもってしまい、5年10年経って、ようやく腰を上げたところで、それを還元してくれる世の中なのかというと、すごく厳しいものを感じる。

一旦、就職して失敗したとしても、もう一回立ち返り自分にとって大事なことはここではなかったと、ある意味よい失敗であったからこっちに行こうという軸をしっかり持てることが大事。また、子どもたちや学生たちと社会との接点の入り口のところで、そのような失敗を大人が伝えられるとよい方向に発展していけるような気がする。

B 委員

自己経営や自分への内省を繰り返しながら、自分にとって一番大事なことはなにかという軸を作っていくってことに関わるのだと思う。どう生きるかという選択肢を作っていくことが可能になるような社会でもあるのだと思う。今までは、大量生産、大量消費で物を持つことがよいとされる社会であったところのある意味せめぎ合いみたいなことが起こっており、それとはズレが生じているのではないかと思う。過去の社会には戻ることができないため、新たな社会へと一歩踏み出すことが問われている。そこに今日の議論である失敗の議論が重なってくるのだと思う。

E 委員

ずっと元気プロジェクトの運営のサポートをしているが、受託事業者は日々どうしたらうまくいか真剣に考えている。先日、高齢者クラブのオールドマン発表会と高齢者作品展で高齢者クラブの方々に話を聞き、今の高齢者クラブを継続するのが大変だという本音が出ているクラブが結構あった。今の状況を継続しなきゃいけないというような予算の出し方ややったことに対してどれだけ成果があったということでは運営に関するモチベーションが全く違うのだと痛感している。本当に継続することが大事な部分と、3年や5年で切り替え、新しいことにチャレンジしていくという体制を市としてどう整備していくかということも今後考えていただけるとよいかと思う。

B 委員

具体的な今後の展開について、担い手をどう育てるかという観点にもなるのだと思う。

D 委員

就職氷河期世代の色々な相談にのったりしているが、40代以降ぐらいの世代が本当に取り残されている。就職先がなかったことから始まり、どんどん深みにはまり、評価されなくなっていくようなスパイラルが起きている。国では、子育て支援に力を入れるという話もあるが、彼らの中には結婚もできていない人がおり、本当に取り残されているのではと感じる。生涯活躍という華やかなでみんな幸せにみたいところもある一方で、そういう闇の部分もあるため、

ここでの議論ではないかもしれないが、そういう人たちも安心して最後生きて死ぬことができる視点も大事。

B 委員

私も大学教員になって今年で31年になるが、最初に受け持った学生たちは全員総合職で決まったが、2年目から戸田委員の世代に入ると、就職氷河期で内定が0であった。記憶にあるのは158社受け、158社目に採用になった学生がおり、落とされるのが快感になってきたと言っていた。新規採用が10年間なかった、いわゆる失われた10年間では、団塊世代の団塊ジュニアの世代の人が多し。今そこが8050問題として、引きこもりがとて多い世代となっている。

その上で捨てられてしまったような感覚を持ってしまうということもあるかもしれない。自分の責任で就職できなかったわけではないため、その人たちの生き方をどう受け止めるのかといったことが問われる。当然、この方々が今度は高齢化という形となるため、そこも考えるべきではないかという視点もある。

G 委員

地域学校共働本部で土曜学習をやっているが、三味線など色々な講座を持っていて、そこで講師されている方というのは、高齢者が多し。発掘すれば、色々な方が色々なところにいるため、いかに人を発掘するかということは、大事。子どもたちが興味を持てるような講座作りをしていくことがまずは最初。次は、子どもたちと一緒に何かを計画するなど発展的なこととしてやっていくと色々なことにチャレンジし、身につけたものを次に生かしていこうということが始まる。

また、人との対話というのはすごく大事。子どもたちに成功体験を与えて失敗も経験させながら成功体験を結びつけていこうとしたら、そこには大人の準備が必要。大人の準備の中で最も大事なものは、子どもたちと相談する時間が必要。これは本当に時間がかかるが、残念ながら学校には膨大な時間はない。そこで地域の方々のお力をお借りし、地域の中の学校にしていく。

子どもたちが活躍すると大人が必ずついてくるため、大人たちはそれを見て、子どもたちも褒められ、一緒にやってくれた大人にも感謝していくという循環作りというのをやっていく必要がある。そのためには、単独の課だけでは無理なためプロジェクトを組めるような体制作りと予算立ての目的をはっきりしないといけない。それによって、学校と地域を補完していけるような循環が生まれるかなと思う。

B 委員

子どもたちどう向き合うのか、時間を取ってきっちりと対話をしていながら、子どもたちをどう支えるかということかと思う。教育振興基本計画の答申案に、「教育や学びが、社会を持

「持続可能なものにしていくための牽引車になっていく」という表現が入る予定。これまでの社会は経済が引っ張り、社会を作り、人々の生活を発展させてきたのだという表現が多かったが、それではこの社会は変わらないだろうとの議論。むしろ、教育や学びといったことをベースにして、社会を運営していくという議論にできないかということ。

例えば、学びや教育、特に生涯学習がベースになりながらプラットフォーム化していく。そのうえに、様々な行政領域を持っていけるようなあり方。生涯学習や社会教育は、実は社会の人間関係を耕しておくべきものであり、社会の伏流水であってそれがないと、一般行政の福祉や産業もうまく動かなくなるのではないかという議論。

そうすると、様々な行政領域と一緒に連携を取りながら、例えば、市民が市民の学びとして単に勉強するというのではなく、様々なものにチャレンジしながら、自分が変わっていくことや社会が変わっていくことを楽しめるような関係を作っていくことになる。そこで互いが認め合い、受け止め合うことで、子どもをきちんと認めていきながら、子どもを支えていけるような関係になっていく。

今、私たちが考えなければいけないのは、人生 100 年ということであるが、学校が関わるのは、人生の初期だけになってきている。人工知能の発達も含めて変わっていく中で、私たちが知っている知識がどんどん陳腐化していくことを含めても、自分で更新していく力を子どもたちがつけないとこの社会で生きていけなくなるのではないかという危機意識は大人の側にもあるはず。そこをどう受け止めながら、子どもと大人との関係をどうつけていくのかということが問われてきているようにも思う。

いくつかのコミュニティでは、そういう取り組みが始まっており、千葉県柏市では、多世代交流型のコミュニティをやり始めて今年で 7・8 年になる。そこでは、高齢の方々が高齢者カフェを運営しながら、子供たちが遊びに来るといった関係を作って、日常的に朝から夕方まで高齢の方は子どもについている。例えば、朝学校に行く時に一緒に歩いて付き合うことや学校の中に入って読書指導を一緒にやっている。帰りは掃除まで一緒にやり、一緒に帰ってくるようなことをして地域でいろんな活動を組織する中で、子どもたちが地域の清掃活動に出てくることや、様々なことで子供の自己肯定感を高めていくようなことが生まれている。

東京に企業の役職退職者 600 人ぐらいが組織する団体があり、高校生とで 5・6 回ワークショップを行ったとき、高校生が「楽になった」とみんな言っていた。大企業の重役たちの経験者が、実は失敗だけの人生だったという話で、子どもたちは、自分は学校で失敗してはいけないと思い込んでいたが、実は偉い人たちがみんな失敗しているのだと聞いて、「すごく楽になった」とみんな口を揃えて言っていた。そういうような関係をこれから作るといったことも大事かと思う。

C 委員

放送大学では、ラジオなどを媒体として色々な講座を行っている。他にも色々な制度があるため、企業や大学等とも連携を取りながら、生涯学習の施策を考えていけると良い。